

# 児童期における両親間の葛藤が精神的回復力に及ぼす影響

稲垣 勉<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup> 教育テスト研究センター <sup>2</sup> 京都外国語大学

本研究の目的は、児童期における両親間の葛藤が青年期の精神的回復力に及ぼす影響を検討することであった。大学生 266 名を対象に回想法を用いて、児童期の両親間の葛藤の認知、両親からの支持的な関わり (i.e., ソーシャルサポート)、現在の精神的回復力を測定し、変数間の関連を検討したところ、以下の結果が得られた。(1) 男女ともに、児童期において両親（もしくは親の役割をする人）の間に葛藤があった場合、両親から子どもに対する支持的な関わりが減少する、(2) さらに、女性の場合は、児童期の両親間の葛藤は、大学生になった後の精神的回復力にネガティブな影響を及ぼす。本研究の結果より、児童期に両親もしくは親の役割をする人の葛藤は、子どもへの支持的な関わりや大学生になった後のパーソナリティにも影響を及ぼす可能性が示された。最後に、本研究の限界と今後の展望を述べた。

**キーワード：** 児童期、青年期、両親間の葛藤、精神的回復力

## 1. はじめに

児童期は主として小学生の時期を指す。幼児期から児童期への移行時には「小1プロブレム」といった適応上の問題が生じやすいほか、小学校高学年にかけて自尊感情が低下する（文部科学省, 2010）などの特徴があるため、自己肯定感の育成や、自他の尊重の意識や他人への思いやりなどの涵養といったことが重視すべき課題とされている（文部科学省, 2011）。文部科学省（2011）によると、家庭における子どもの徳育にかかわる課題として、都市化や地域における地縁的なつながりの希薄化、価値基準の流動化により、保護者が自信を持って子育てに取り組めなくなっている状況があるという。こうした子育て不安などの問題により、子どもが社会性を十分に身につけられないまま小学校へ入学することが、小1プロブレムの一因となる可能性が指摘されている。このように考えると、児童期における親子関係は、小学校における適応、ひいてはその後の人格形成にも影響を及ぼす可能性が推察できる。

児童期における親子関係が、その後のパーソナリティに及ぼす影響について検討した研究は、これまで数多く存在する。たとえば菅原・伊藤（2006）は、大学生 249 名を対象に、児童期における母親の養育態度が青年期の自我形成に与える影響を検討するため、自尊感情と対人不安を取り上げて検討を行っている。その結果、母親の「過保護—期待（頼めばどんな大変なことでも喜んでしてくれる、身の周りのことをうるさいほどよく手伝ってくれる、など）」の養育態度は自尊感情と正の相関 ( $r = .153$ ) がみられ、「厳格—拒否（話しかけても相手になってくれない、同じことをしてもあるときは叱られ、あるときは叱られない、など）」の養育態度は対人不安の各下位尺度（集団や他人に圧倒される悩み、自分や他人が気になる悩み、自分に満足できない悩み）と正の相関（順に  $r = .285, .262, .201$ ）

がみられている。

また、鈴木・塚野（2017）は、大学生および大学院生、計148名を対象に、現在の愛着スタイルに幼少期の親子関係が及ぼす影響を検討している。その結果、安定した親子関係は「安定型」という安定した愛着スタイルを、不安定な親子関係は「不安型」「回避型」という不安定な愛着スタイルをそれぞれ導くことが示された。

こうした研究においては、精神的健康や愛着スタイルなどの従属変数に影響を及ぼすものとして、親のしつけや養育態度などが取り上げられることが多いが、親と子の関係に限らず、両親間の葛藤が影響を及ぼすことも考えられる。たとえば、両親間に葛藤が多い場合、両親から子どもへのポジティブな関わり（i.e., ソーシャルサポート）が減少し、その結果としてパーソナリティなどにネガティブな影響が及ぶということも予想できる。

そこで本研究では、つらいストレス経験からの立ち直りを導く心理的特性である精神的回復力（小塩・中谷・金子・長峰，2002）を取り上げ、この点を検討することとした。精神的回復力とは、困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程、能力、および結果（Masten, Best, & Garnezy, 1990）とされるレジリエンスの状態を導く心理的特性であり、小塩他（2002）によって、この精神的回復力を測定する尺度が作成されている。

精神的回復力に関する研究を概観すると、精神的回復力は自尊心と正の相関があること（小塩他，2002）や、精神的回復力が高いと、つらいネガティブライフイベントに対する落ち込み得点が低いこと（目久田・武田・磯部・江村・新見・前田，2004）などが示されており、精神的回復力は精神的な健康や立ち直りとの関係が示されている。

また、田村（2014）は、青年期の精神的回復力に幼少期の両親との親密性が及ぼす影響について検討を行い、幼少期に母親や父親との関係が親密であった場合、親密でなかった場合と比して、大学生になった後の精神的回復力が高いことを示している。加えて、大島（2009）は、夫への信頼感が高い妻の娘ほど、父親から支持的な関わりを多く受けていることや、娘が父から支持的な関わりを多く受けたと認識することが、娘の自尊心や幸福感の高さ、そして抑うつの高さと関連することが示されている。このように、両親との過去の関わり方や、家族関係が良好であることが、精神的回復力や自尊心、幸福感につながる可能性が示されている。

これらの先行研究を踏まえ、本研究では、幼少期の両親の夫婦関係および親子関係が青年期の精神的回復力に及ぼす影響について検討する。本研究で想定している分析のモデルは Figure1 のとおりである。両親間の葛藤の認知が高いほど、両親からのポジティブな関わりが減少し、精神的回復力にネガティブな影響が及ぶと予想する。また、両親間の葛藤の認知から直接、精神的回復力に影響が及ぶ可能性についても併せて検討する。

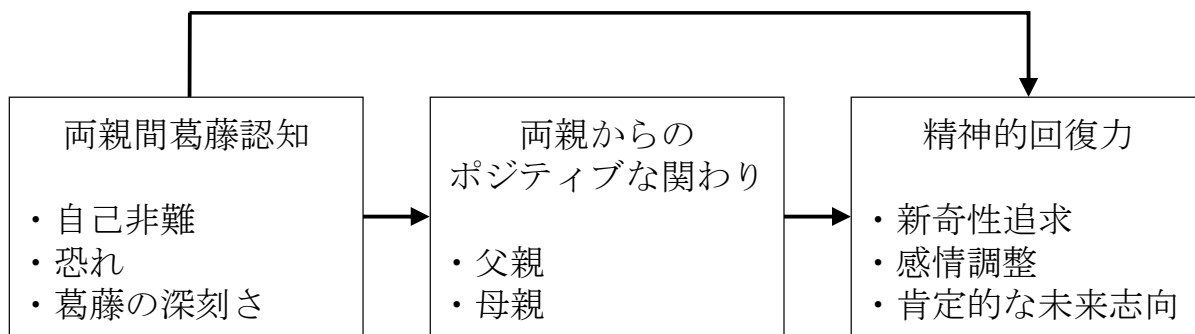


Figure1 本研究における分析のモデル

注) 両親間葛藤認知および両親からのポジティブな関わりは児童期を振り返って回答を

求め、精神的回復力は現在の状態について回答を求める。

## 2. 方法

**2.1 参加者** 九州地方の4年制国立大学の大学生266名（男性108名、女性158名、平均年齢22.5歳、 $SD = 0.5$ 歳）を対象とした。

**2.2 材料** 本研究では、以下の材料を用いた。

(1) フェイスシート 年齢、性別を尋ねた。

(2) 両親間葛藤認知 児童期における両親間の葛藤について、当時どのように認知していたのかを測定するために、川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤（2008）が作成した両親間葛藤認知尺度を用いた。この尺度は3つの下位尺度からなり、それぞれ自己非難（項目例：私の両親は私がしたことについてけんかをすることが多い、両親がけんかをしているのはたいてい私のせいだ）3項目、恐れ（項目例：両親がけんかをしているとどちらかが傷つくのではないかと心配になる、両親がけんかをしていると不安になる）5項目、葛藤の深刻さ（項目例：私の両親はけんかが終わっても、お互いのことを怒ったままだ、私の両親はお互いの悪口や不満を家の中でよく言う）12項目の計21項目で構成されている。本研究では児童期の頃について尋ねるため、すべて表現を過去形にして使用した。「それぞれの文章が小学生の頃のあなたのご両親にどれくらいあてはまるかを考えて、1から4のいずれかの数字に○をつけてください。」<sup>1</sup>と教示し、「1：ちがう—4：そのとおり」の4件法で回答を求めた。

(3) 両親からの支持的な関わり 親子関係の中でも、特に両親からの支持的な関わりを測るために、大島（2009）にならい、久田・千田・箕口（1989）の学生用ソーシャルサポート尺度を「あなたの父親または父親役割の人の場合」と「あなたの母親または母親役割の人の場合」のみに絞って用いた（項目例：あなたが落ち込んでいると、元気づけてくれる、あなたに何かうれしいことが起きたとき、それを我が事のように喜んでくれる）。この尺度は1因子である。児童期の両親もしくは両親の役割をする人からの支持的な関わりについて測定するため、児童期には経験することが少ないと考えられる2項目（あなたが大切な試験に失敗したと知ったら、一生懸命なぐさめてくれる、1人では終わらせられない仕事があったときは、快く手伝ってくれる）を除いた14項目を、表現を過去形にして用いた。「それぞれの文章が小学生の頃のあなたのご両親にどれくらいあてはまるかを考えて、1から4のいずれかの数字に○をつけてください。」と教示し、父親もしくは父親役割の人、母親もしくは母親役割の人のそれぞれについて、「1：あてはまらない—4：あてはまる」の4件法で回答を求めた。

(4) 精神的回復力

現在の精神的回復力の程度を測定するため、小塩他（2002）の精神的回復力尺度を用いた。この尺度は3つの下位尺度からなり、それぞれ新奇性追求（項目例：色々なことにチャレンジするのが好きだ、新しいことや珍しいことが好きだ）7項目、感情調整（項目例：自分の感情をコントロールできるほうだ、動揺しても、自分を落ち着かせることができる）9項目、肯定的な未来志向（項目例：自分の未来にはきっといいことがあると思う、将来の見通しは明るいと思う）5項目で構成されており、計21項目である。「それぞれの文章が現在のあなたにどれくらいあてはまるかを考えて、1から5のいずれかの数字に○をつ

---

<sup>1</sup> 離婚や死別等の理由により、すべての参加者が必ずしも児童期に両親と関わりがあったとは限らないため、この点を配慮して「両親」という表記と併せて「母親（父親）役割の人」という表現を適宜追加した。また、手続きの箇所所述べるとおり、回答は任意であることを伝えた上で、調査を実施した。

けてください」と教示し、「1:いいえ-5:はい」の5件法で回答を求めた。なお、他の尺度をいくつか使用しているが、本報告とは関連がないため、報告は割愛する。

**3.3 手続き** 授業終了後の時間などを用いて調査対象者に質問紙を配布し、回答を求めた。調査の実施にあたっては、調査票への回答は任意であるとともに、氏名や学籍番号等の記入は不要であり、個人が特定されることはないこと、回答の有無によって不利益を被ることはないことを質問票の表紙に記載したほか、調査実施時に口頭による教示も行った。調査対象者が回答に要した時間は10分程度であった。

**3. 結果および考察**

**3.1 各尺度の得点化** 各尺度について、逆転項目を含むものは逆転処理を施した上で合算平均値を求め、当該の尺度得点とした。得点が高いほど、当該の尺度名の傾向が高いことを示す。なお、母親からの支持的な関わりの平均値には性差が認められ、男性より女性の方が有意に高かった ( $t(238) = 2.48, p = .01, d = 0.32$ )。したがって、以降の分析は男女別に実施することとした。

**3.2 各尺度の記述統計量および各尺度間の相関** 各尺度の記述統計量と、各尺度間の相関係数を求めた。その結果を Table1, 2 に示す。各尺度の  $\alpha$  係数を算出したところ、男性において感情調整が  $\alpha = .64$  とやや低い値を示したが、それ以外の尺度は男女ともにいずれも  $\alpha \geq .73$  の値を示していた。したがって、各尺度は一定の内的一貫性を有すると判断し、以降の分析に用いた。

Table1 各尺度の記述統計量および各尺度間の相関係数 (男性)

	2	3	4	5	6	7	8	$\alpha$	M	SD
1 自己非難	.22 *	.42 **	-.30 **	-.34 **	.04	-.14	-.16	.77	1.59	0.64
2 恐れ	—	.23 *	.13	.09	.19	-.08	.04	.74	2.41	0.75
3 葛藤の深刻さ		—	-.43 **	-.45 **	-.01	-.01	-.07	.81	2.09	0.50
4 支持的な関わり (父)			—	.70 **	.11	.10	.06	.93	2.92	0.63
5 支持的な関わり (母)				—	.15	.12	.18	.90	3.23	0.51
6 新奇性追求					—	.29 **	.50 **	.73	3.65	0.61
7 感情調整						—	.27 **	.64	3.22	0.55
8 肯定的な未来志向							—	.82	3.68	0.78

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ .

Table2 各尺度の記述統計量および各尺度間の相関係数 (女性)

	2	3	4	5	6	7	8	$\alpha$	M	SD
1 自己非難	.25 **	.28 **	-.17 *	-.17 *	.07	-.36 **	-.09	.87	1.46	0.61
2 恐れ	—	.48 **	-.08	-.07	.01	-.12	-.06	.78	2.55	0.76
3 葛藤の深刻さ		—	-.49 **	-.48 **	-.11	-.23 **	-.24 **	.83	2.02	0.54
4 支持的な関わり (父)			—	.67 **	.29 **	.31 **	.40 **	.94	3.07	0.70
5 支持的な関わり (母)				—	.23 **	.13	.41 **	.93	3.42	0.60
6 新奇性追求					—	.40 **	.59 **	.85	3.73	0.75
7 感情調整						—	.45 **	.74	3.26	0.63
8 肯定的な未来志向							—	.84	3.79	0.81

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ .

**3.3 各尺度間の関連** Figure1 で示したとおり、児童期における両親間の葛藤の認知が両親からの支持的な関わりに影響し、青年期の精神的回復力に間接的に影響を及ぼすという

モデルを仮定し、男女別に共分散構造分析を実施した。男女ともに有意なパスのみを残したものを、最終的なモデルとして採択した。その結果を Figure2, 3 にそれぞれ示す。

男性のデータを対象とした分析の結果、モデルの適合度は  $\chi^2 = 17.515$ ,  $df = 10$ ,  $p = .064$ , CFI = .956, RMSEA = .087, GFI = .961, AGFI = .858 という値が得られた。また、女性のデータを対象とした分析の結果、モデルの適合度は  $\chi^2 = 16.478$ ,  $df = 14$ ,  $p = .285$ , CFI = .993, RMSEA = .035, GFI = .972, AGFI = .928 という値が得られた。いずれのモデルにおいても適合度指標は許容範囲内にあると考えられることから、これらのモデルはデータの共分散構造をよく説明したと判断した。

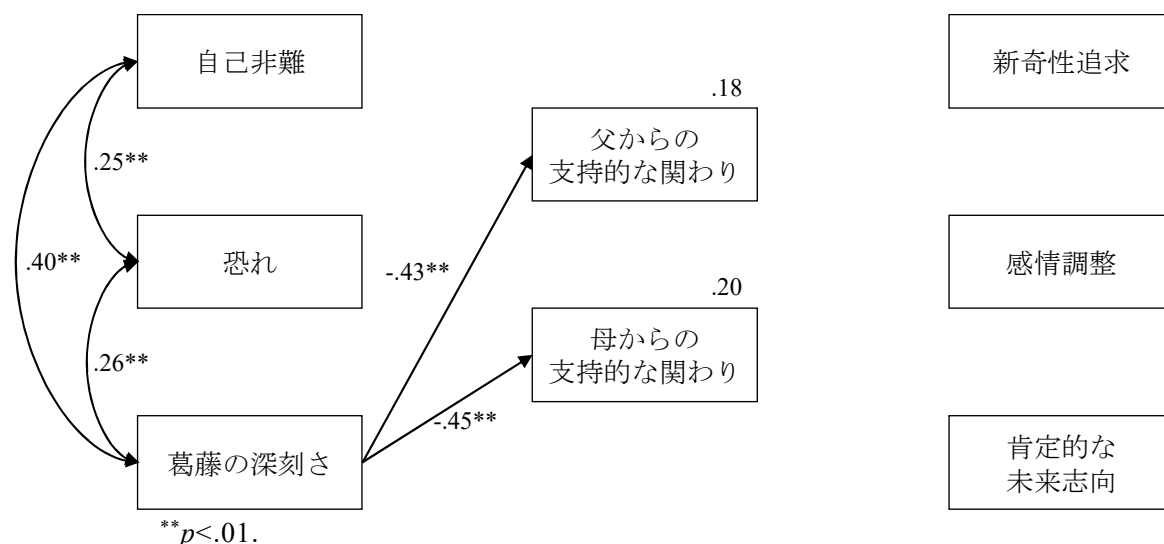


Figure2 共分散構造分析の結果 (男性)  
注) 変数の右上の数値は決定係数 ( $R^2$  値) を示す。

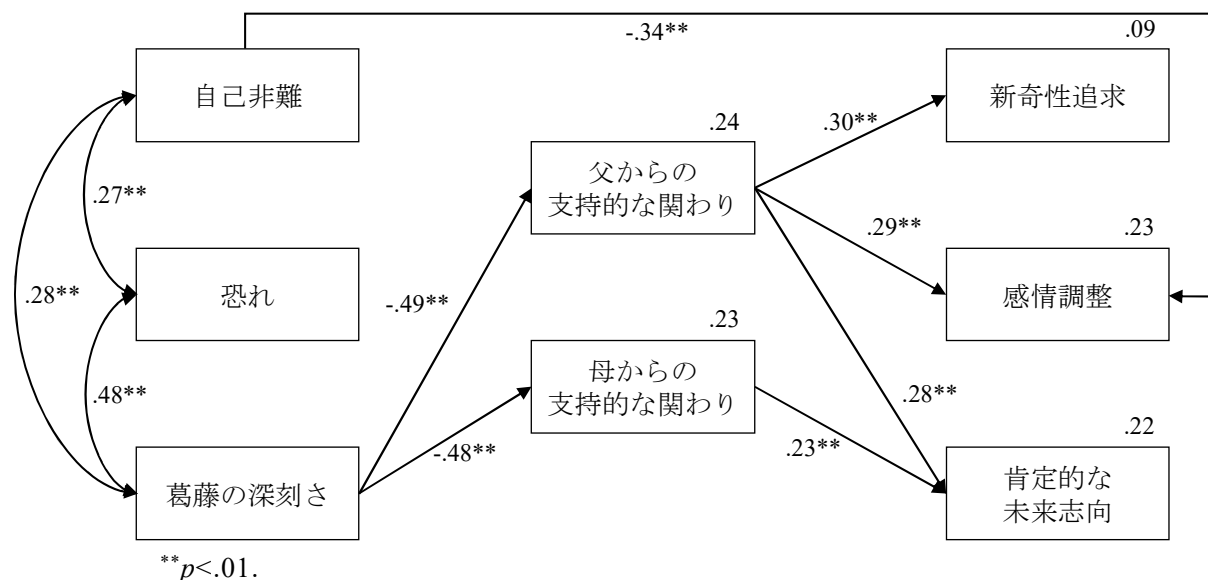


Figure3 共分散構造分析の結果 (女性)

男女ともに、葛藤の深刻さが父母からの支持的な関わりを抑制するという点が共通していた。したがって、両親が頻繁にけんかをしたりもめていたりする、お互いの悪口や不満を言っているといった葛藤の深刻さが高い場合、男女ともに父母からの支持的な関わりが

減少することが示された。

しかし、父母からの支持的な関わりが精神的回復力に及ぼす影響については、男女間で異なる結果が観察された。具体的には、女性においては父母からの支持的な関わりは精神的回復力への有意な影響を及ぼしていた。したがって、両親間の葛藤は、両親からの支持的な関わりを減少させることで、間接的に精神的回復力に負の影響を及ぼすことが示された。また、女性においては自己非難から感情調整への直接の負の影響も見られた。両親の葛藤の原因を自分に求めるほど、大学生になった後の感情調整にネガティブな影響が及ぶといえる。葛藤の深刻さや恐れは自己非難と正の相関が見られていることから、葛藤が深刻であるほど、子どもの恐れや自責の念が高まりやすいことが推察できる。両親以外の家族や、場合によっては担任教師が相談に乗るなどして恐れや自責の念を緩和し、自己非難につながらないようにするサポートも必要といえるだろう。

一方、男性においては父母からの支持的な関わりから精神的回復力への影響は観察されなかった。この点について、男性の精神的回復力に影響を及ぼすのは、父母による支持的な関わりよりも、友人や教師などによる支持的な関わりである可能性も考えられる。たとえば、中学1年生のときの担任への信頼感が、青年期における他者軽視傾向や自尊感情に影響を及ぼすという研究もある(稲垣・澄川, 2021)。こうした知見を踏まえれば、男性の精神的回復力に対し、父母以外からの支持的な関わりの影響についても検討する必要があると思われる。

2020年から始まったコロナ禍により、児童虐待やDVが増加しており、その要因には「密着した家族関係」と「家族や個人の孤立化」が指摘されている(齋藤, 2021)。すなわち、自粛要請などにより外出などが控えられる中で、これまでは適度に距離を取ることができた家族が、以前にもまして家の中で密になり、各々が窮屈さを感じる結果にもつながっていると思われる。齋藤(2021)は、こうした生活スタイルの変化が父親と母親にもたらす影響についても考察している。そこでは、たとえば父親優位の家庭においては、在宅勤務を行う父親に家族が気を遣う。そして、母親としては在宅する父親や子どもの世話の負担が増加し、息抜きをする時間も持ちにくくなる。その結果、些細なことで不満が爆発し、DVや虐待につながるのではないかと、いうものである。このように、家庭内でのコミュニケーションのあり方が課題となっているコロナ禍という現状を踏まえれば、両親間の葛藤が子どもへの支持的な関わりに影響を及ぼすことが示した本研究の結果は重要であると言えよう。

**3.4 本研究の課題と今後の展望** 最後に、本研究はその目的を達成するために、児童期における両親の葛藤の認知や、両親からの支持的な関わりについて、大学生を対象に回想法を用いた調査を行った。この方法は現在の状態の影響を受けるかもしれず、現在において精神的回復力が高い者は、過去の家族関係や両親からの関わりの方のポジティブな側面を想起しやすい(または、現在の精神的回復力が低い者は、過去の家族関係や両親からの関わりの方のネガティブな側面を想起しやすい)といった可能性も考えられる。したがって、本研究において得られた結果の解釈には注意が必要である。

こうした制限はあるものの、本研究は児童期における両親間の関係性が、青年期の精神的回復力に影響するプロセスの一端を示すことができた。今後は、本研究では収集していなかった他のソーシャルサポート源からの影響(e.g., 友人, 担任教師)についても検討する必要があると考える。

また、本研究においては、回想の対象とした小学生の頃に、両親やそれ以外の家族(祖父母, 兄弟姉妹など)がいたか、そして同居していたか否かについては、センシティブな内容でもあるため尋ねなかった。しかしながら、両親間の葛藤が生じた際、祖父母が間に

入って仲裁したり，兄弟姉妹とともに励まし合ったりすることができた可能性もある。そして，調査時に両親と同居しているか否かなども，結果に影響を及ぼす可能性が考えられる。今後は，こうしたことも考慮に入れた検討も一考に値するだろう。

最後に，本研究で女性において観察された結果である，両親からの支持的な関わりの多さが精神的回復力を促進するというプロセスの詳細については明らかにできていない。この点については，少し領域は異なるが，不登校児童生徒の回復過程を検討した加藤・赤堀（2005）の研究が参考になる。この研究では，不登校児童生徒に対し，電子メディアを用いた個別カウンセリングやグループカウンセリングを実施したところ，電子メールカウンセリングを行った児童生徒のうち，自己開示を多く行っていた場合は，そうでない場合に比べて不登校状態の改善が大きかったことが示されている。こうした結果を踏まえれば，両親からの支持的な関わりを受けながら，自らの悩みを相談できたという経験が，両親に支えられているという情緒的な満足感や安心感につながり，安定した精神的回復力につながったというプロセスが推察できる。今後は，こうしたプロセスの詳細についても明らかにしていくことが望まれる。

#### 4. 参考文献

- 久田 満・千田 茂博・箕口 雅博 (1989) 学生用ソーシャルサポート尺度作成の試み(2), 日本社会心理学会第30回大会発表論文集: 143-144
- 稲垣 勉・澄川 采加 (2021) 中学校教師への信頼感が他者軽視傾向ならびに自尊感情に及ぼす影響——回想法に基づく検討——, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 30: 81-90
- 加藤 尚吾・赤堀 侃司 (2005) 電子メディアを用いたカウンセリングにおける不登校児童生徒の自己開示に関する分析, 日本教育工学会論文誌, 29: 607-615
- 川島 亜紀子・眞榮城 和美・菅原 ますみ・酒井 厚・伊藤 教子 (2008) 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連, 教育心理学研究, 56: 353-363
- Masten, A. S., Best, K., & Garmezy, N. (1990) Resilience and development: Contributions from the study of children who overcame adversity, *Development and psychopathology*, 2: 425-444
- 目久田 純一・武田 さゆり・磯部 美良・江村 理奈・新見 直子・前田 健一 (2004) 大学生の精神的回復力とコーピング方略・落ち込みの検討, 広島大学心理学研究, 4: 129-138
- 文部科学省 (2010) 生徒指導提要, 教育図書
- 文部科学省 (2011) 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題  
([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1283165.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1283165.htm)) 最終閲覧日: 2022年5月31日
- 大島 聖美 (2009) 妻から夫への信頼感が青年期後半の娘の心理的健康に与える影響, 発達心理学研究, 20: 351-361
- 小塩 真司・中谷 素之・金子 一史・長峰 伸治 (2002) ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性——精神的回復力尺度の作成——, カウンセリング研究, 35: 57-65
- 斎藤 環. (2021) コロナ禍における「ひきこもり生活」がもたらす心理的影響, 日本労働研究雑誌, 729: 84-89
- 菅原 正和・伊藤 由衣 (2006) 児童期の母子関係が青年期の自我形成に及ぼす影響——自尊感情 (Self Esteem) と対人不安を中心として——, 岩手大学教育学部研究年報, 65: 31-44
- 鈴木 昌喜・塚野 弘明 (2017) 大学生の愛着スタイルと幼少期の親子関係に関する研究, 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 16: 71-81
- 田村 隆宏 (2014) 青年期の精神的回復力に及ぼす幼少期の親子関係と性差の影響——両親との親密性に関する検討——, 日本心理学会第78回大会発表論文集: 315

**付記** 本論文は著者の指導のもと、東 恵梨子さんが平成 29 年度に鹿児島大学教育学部に提出した卒業論文のデータを再分析し、新たにまとめ直したものです。本研究にご協力いただいた参加者のみなさまに、心から感謝を申し上げます。なお、本研究の一部は、日本グループ・ダイナミックス学会第 67 回大会において発表されている。